

矢作川流域圏懇談会「第3回勉強会（海の勉強会）」開催結果報告

～見る、触れる、五感で感じる矢作川河口の今、未来～

1. 実施概要

(1)実施概要

○実施日時：平成23年7月2日(土)
10:30～14:20

○開催場所：

【集合】西尾市一色町千間地先海岸堤防
【訪問箇所】一色干潟、人口干潟（一色さかな広場西側海岸）、矢作川干潟再生箇所、矢作川浄化センター放流渠
【座学会場】矢作川浄化センター会議室

○参加者：59名（事務局含む）
別添：「出席者名簿参照」

(2)内容

【プログラム】

1. 参加者受付
2. 見学会等の開催
 - (1)一色干潟の見学及び衣崎漁業、愛知水産試験場からの説明
 - (2)人口干潟（一色さかな広場西側海岸）の見学及び西三河漁協との意見交換
 - (3)矢作川干潟再生箇所の見学及び国交省等からの説明
 - (4)矢作川浄化センター放流渠の見学及びセンター職員による施設説明
3. 見学会のおさらい、質疑応答

2. 開催報告

矢作川流域圏懇談会市民会議では、1つの流域としてつながりのある山、川、海という3つの各ブロックで勉強会を進めてきており、今回は山、川に続く「海の勉強会」を開催し、干潟や河口部で今、起きている問題などを参加者みなで共有しました。

各見学場所において学ぶことができたことを整理しました。



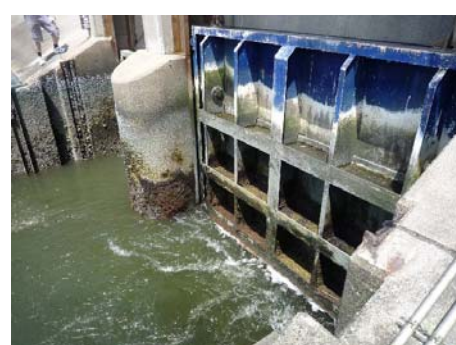
一色干潟の見学



人口干潟の見学



矢作川干潟再生箇所の見学



放流渠の見学

■ 海の勉強会を通じて共通認識できた課題

- ・ アサリは水質が良すぎても成育が良くないため、浄化センターに必要な応じて放流する水質のコントロールをお願いしているが実現していない。
- ・ 中山水道の浚渫が終了したため、現在、干潟再生に用いる土砂の確保が課題である。
- ・ 西三河漁協では、収入が良いアサリ漁への転向が増え、曳き網漁業や海苔養殖業者が減っており、資源管理や特定漁業に集中への対応が課題である。
- ・ 矢作川浄化センターでは、年々、流入排水の温度が上昇しており、放流水温の低下への対応が課題である。
- ・ 干潟の喪失に繋がる事業を監視する団体が無いのであれば、市民会議が担っていく必要がある。
- ・ 勉強会を開催しなければならないほど、これまでは海の人と川の人と山の方はコミュニケーションが不足し、共通認識が持てていなかった。
- ・ 色んなデータをうまく寄せ集めながら、いま私たちは一体何ができるかを議論していく必要がある。
- ・ “きれいな海” から “豊かな海” へ取組みが変化しつつあるが、まだ何をすれば豊かな海になるのか科学的な解明が進んでいない。

■ 今後の活動を通じて共通認識を持つ必要がある課題

- ・ 川の水にミネラルが少なくなったため植林するという植林神話は、山の方での課題認識と大きく違い、今後の勉強会で本当の問題について共通認識を持つ必要がある。
- ・ 土砂管理など法律で定められていながらも、流域圏全体を総合的に見たときに連携が図られていないために生じている問題や課題について共通認識を図っていく必要がある。

(1) 一色干潟

衣崎漁業 黒田組合長、愛知水産試験場石田副場長から一色干潟の現状などについてご説明頂きました。

- ・ 一色干潟は、国内有数のアサリの水揚げがある。稚貝は、六条潟で採取してくる。
- ・ 海苔業者は、年々減少しており、アサリ漁へ転向する人もいる。
- ・ アサリは水質が良すぎても成育が良くないため、浄化センターに時期を限定して窒素などを増やして欲しいと要望している。
- ・ 昔は、エビ、カニも多かったが近年は商品価値のあるものは少ない。逆に赤エイが増えて困っている。バカ貝（青柳）もアサリ漁に混じって多いが、このあたりでは商いされないので海上で選別して廃棄している。
- ・ 鵜（ウ）は、昔は糞を集め、肥料として売っていた。また、ボラなど商品にならない小魚を捕食するため海の漁師には喜ばれる。逆に川ではアユを食べるので嫌われている。
- ・ 干潟には、アマモ、コアマモ、オゴノリなどの藻類が植生している。今年はアオサが少ないが、多いと腐敗し悪臭を放つことがある。



(2) 人口干潟（一色さかな広場西側海岸）

愛知水産試験場石田副場長、三河港湾事務所 神谷課長などより、干潟の重要性や事業概要などについてご説明頂きました。

- ・ 620万 m³の中山水道の浚渫土砂を用いて620haの人工干潟域を造成しているが、これまで三河湾全体では、約3000haの干潟が埋立てられており、まだまだ足りない。
- ・ 中山水道の浚渫が平成16年に終了したため、現在、干潟再生に用いる土砂の確保が課題である。
- ・ 干潟再生に用いる土砂は、アサリにとっては粒径が不均一なものの方が良い。
- ・ 現在、人工干潟は潮干狩り場として利用されている。(1500円/1人1日(上限5kg))



場所を西三河漁協事務所へ移し、高須総務部長より、三河湾における漁業の状況などについて説明して頂きました。

- ・ 西三河漁協では、中層と海底の2層を対象とする小型底引き網漁が主な漁法となる。
- ・ 水揚げされる主な魚種はこの時期であれば、タコ。その他、ヒラメやカレイ、クルマエビ、ヤリイカなどがある。
- ・ 魚類にとって産卵場所として藻場がとても重要である。愛知県の外海はトラフグの水揚げ

が多いが、稚魚へのタグ付けによる放流箇所別の生き残りを確認すると外海よりも内湾のアマモ場などでの放流が良いことが証明されている。

- ・ アサリ漁の資源管理については、稚貝の採取、放流を実施し、漁においては、時間管理と採取可能なサイズの規定により制限を行っている。
- ・ 漁師の年収は、好不調あるので一概に回答ができない。
- ・ アサリ漁については、他の曳き網漁業者と比較すると実収入が多いため、今のところ後継者問題は起きていない。
- ・ 海苔養殖が衰退してきた理由は、スミノリ菌という病気などが原因のひとつである。病気増加の原因は不明であるが、近年、水温が低下しないことも理由かと思う。また、海苔養殖業者が減少した理由としては、他の漁と比べ時間が掛かりすぎる、国際競争力が激化しているなどの理由がある。
- ・ 漁師が参加する植林等のイベントは、最近では県漁連などから参加要請や案内がないが、今後も連携して参加できれば良いと思う。



(3) 矢作川干潟再生箇所

国土交通省 宇野専門職より、矢作川干潟再生の事業概要などについて説明を行いました。

- ・ 干潟再生は、60ha を目標としており、現在、干潟全体を造成するのではなく沖の砂洲と護岸との間の窪地を埋める形で実験施工している。
- ・ 造成には、流下能力が低いため浚渫が必要となった5～6km 上流の上塚橋付近の浚渫土砂 12,200m³ を運んで使っている。
- ・ 昔と比較すると1 m程度の河床低下が起きており、汽水域が上流に拡大し、シジミの生育範囲が上流に移動したという報告がある。



(4) 矢作川浄化センター放流渠

矢作川浄化センターの放流渠の見学を行い、その後、事務所にてセンターの事業について説明を受けました。

- ・ 矢作川浄化センターは、敷地面積 61.1ha、4市1町60万人分の下水を約23万トン処理している施設である。
- ・ 平成4年ごろには15~16度であった排水温度が、現在は約20度位と排水温の上昇が問題となってきている。



- ・特に冬場の処理水の温度を下げるため、下水約 23 万トンのうち約 3 万トンについては自然池などを活用したアシ原浄化の実験実施箇所を経由した処理水と混ぜて矢作川に放流している。
- ・排水汚泥は、全量焼却処分している。

(5) 見学会のおさらい、質疑応答 (・ ご意見、提案 ▶ 回答)

- ・ 矢作川浄化センターは、埋立て地に建設されているが今後もこうした埋立てによる浜や干潟の喪失が続くことは問題である。水質管理においては監視する団体があるが、浜や干潟の埋立ての監視の役は漁協が担っているのか？また、こうした仕組みや動きはあるか？ないのであれば課題として見てみていければよいと思う。(鷺見)
 - ▶ この市民会議がやらなければならない仕事ではないかと思う。(井上)
 - ▶ 総合管理の現状の話であれば、例えば伊勢湾では、国を含めた計画ができており、県や国の管理する河川、それから陸域、海も含めて総合的に取組む組織がある。そこでは、浄化処理水等を含めた管理を行っている。(溝口)
- ・ 漁民の森づくり「マリンプルー21」という活動を行い、何をやれば海の幸とどういう風に関係に繋がるかを仮定であっても漁民に理解してもらうことが流域としての活動が前に進むと思う。1つは海産物の餌となる水の栄養素の話、もう1つは海の中の食物連鎖に大きな影響を与える濁りの問題などが、流域として私たちが豊かな海にできる話であり、そうすると森里海が繋がると考える。(井上)
- ・ 色んなデータをうまく寄せ集めながら、いま私たちは一体何ができるかを私は海部会の中では議論していきたいし、そういう問題を山部会方とか川部会の方にもそんな問題を見ていければありがたいなという風に思っている。(井上)
- ・ 海の立場で、川の水にミネラルが少なくなったため植林するという植林神話は、山の方での課題認識と大きく違う部分である。次回は、山の勉強会が山の上流部で開催されるので何がほんとに問題なのかを考えていきたい。(稲垣)
- ・ 勉強会を通じて、こういう集まりをしななければいけない程、海の人と川の人と山の人っていうのは、コミュニケーションもできてないし、認識も共有できてないということがよく分かった。出発点の共有という今日の目的はある程度達成できたと思う。(蔵治)
- ・ 具体的には、きれいな水を流すというミッション、砂を下流に流さないというミッションなどは法律に従い目的に沿って実行してきたところであるが、実は最下流の海でそれらの取組のやり過ぎが問題になっており、行政へ課題認識してもらう前に川や山の側が認識する必要があるという事が出発点かという風に個人的には思った。(蔵治)
- ・ 海に栄養が必要だという話は我々も比較的最近になってから言い出していることであるが、まだ、何をすればどういう応答が出るのかという点については分かってないことが殆どで、科学的な追及が遅れている。まず、きれいな海にしようというのが一歩目であり、続いて、

豊かな海にするための科学的な研究を懸命にやっているところである。(石田)

- ・ 天竜川でも上流の山の人、土砂がなくなり海岸が侵食されていることを知っているが、法律に基づく動きを曲げられないという矛盾がある。部会長が言われたように、その辺を周囲の力で変えていくというのが一番大きなパワーであるし、この流域圏の取り組みの意義がある。(青木)

以上